

雪の下

柘植孝子

母は言う。「雪の下」が私の命を救ったと。肉厚

な緑の葉に白い筋が入り、葉全体に細かい針のよ
うな毛が生えていた。井戸端の砂や小石が混じっ
た場所に植えてあった。井戸水はひどく鉄分が多
いので周りの砂や石を赤茶色に染め、そこだけが
別世界の星を想像させた。雪の下は井戸水の水滴
を浴び、一層美しく緑色に輝いた。季節が来ると、
小さなかわいい花が咲き、まるでお祭りの竹ざお
に吊るした提灯のように並んで段々に咲いていた。
小豆色の茎に白い可憐な花が開くと雪のように見
えた。植物図鑑を開くと、和名は花を雪に見立て、
その下に緑の葉が見えることからとも、冬、雪の
下に緑の葉が見えることからとも言われる、と書
いてある。

四、五歳の頃だろうか、私にはみち子ちゃんと
いう友達がいた。おかつぱ頭のおとなしい、優し
い子だった。二人は子犬のようにキヤツ、キヤツ

とじゃれあって遊んだ。みち子ちゃんの「ウフフ
フ……」と笑う声が聞こえて来る。

ある日、人が大勢みち子ちゃんの家に行った。私
は板塀の下にしゃがみ込んで、父の大きな下駄を
履き、家の中を覗き見ていた。皆、黒い服を着て
泣いている。

その日を境に、みち子ちゃんがいなくなった。
いつも板塀の下から家の中を覗く小さな女の子が
脳裏に浮かぶ、それは私なのに、離れた所から私
は私を見ている。たったそれだけのことなのに、
なぜか忘れられない。顔もはつきりと思い出せな
い、小さなおかつぱ頭のみち子ちゃん。

母は悲しそうな顔で、あんたは雪の下に助けら
れた、でもみち子ちゃんはだめだった、と辛そう
に話す。私はなぜそんな顔をするのか、その時は
理解できなかった。今、図鑑で効能を見ると、利
尿、むくみに乾燥した葉を、煎じて服用とある。
みち子ちゃんは、はやり病で亡くなったと聞いた
が、今では何の病気だったか知ることもできない。
でも亡くなった日のことは鮮明に覚えている。あ
のころはその日に亡くなったことさえ知らずにい

た。「遊ば」とみち子ちゃん家ちに行った。いつもは「はあーい」と待ってましたとばかりに飛び出して来るのに、いつまでたっても出てこないみち子ちゃんを、黒い板塀を背に待っていた。何日も誘いに行った。子供心に一人でいると「人さらい」に連れて行かれるという話を思い出し、もしかしたら「人さらい」に連れて行かれたのではと、ぶるぶる震えるほど怖かった。私も連れて行かれたらといつも不安な気持ちでいた。

しばらくして、私は保育園に行った。「第一保育園」は歩いて一時間ほどのところにあった。道端には丈の長いさまじまな草花が咲き乱れ、太陽がさんさんと降り注ぐ、何もかも黄金色に輝いた田舎道をテクテクと歩いた。暑さやまぶしさまでも感じる夢を見ることがあった。保育園では、お昼寝ができなくて先生を困らせていた。いつもブランコに乗り遊んでいた。今にも倒れそうな支柱に鎖と丸木で作ったブランコが二つぶらさがっていた。遠くの方に工場があり、一本の高い煙突から真青な空にスーッと煙が続いている。一枚の絵画のようだった。保育園は王子製紙の敷地の一角に

あり、大きな二本のセメントでできた見上げるような門をくぐり園舎に行った。

その頃の私は泣きべそで、下を向き上目遣いで見ていた。いつも不安でスカートの裾をつかみ持っていた。スカートの前は、かじってできた穴が無数に開いていた。それでも両親は近所の仕立屋さんさんに頼み、かわいい洋服を着せてくれた。お気に入りの洋服にもいつの間にか穴が開いていた。我家は貧乏なのに、子供には苦勞させまいと一生懸命だったと後になって聞かされた。

保育園での一枚の写真がある。皆は笑って写っている。その中に周りの皆より一まわり大きな顔で、今にも泣き出しそうな目をカメラに向け、口はへの字に結んだ、父によく似た私がいた。ワンピースを着て、胸元には布で作った小さな花のブローチをつけている。あの写真はどこに行ったのだろうか。懐かしく思い出している。久しくみち子ちゃんのことも思い出さなかった。今六十七歳となり、みち子ちゃんの五十回忌も終ってしまつた事に気がつき、「ごめんね」と心の中で手を合わせる。

真白なおにぎり

柘植孝子

小学校六年生の秋、明日は運動会。予行演習の昼休みのことだった。担任の先生の膝には、竹の皮で包んだ弁当があった。

昼休みもそろそろ終ろうとしていたが、生徒達は食べ終えて騒いでいる。

先生は忙しそうにシュツ、シュツと音を立て、竹の皮の紐をほどき、弁当を開いた。何が入っているのか興味津々で見っていた。

皆は遊びや話に夢中で誰も先生の弁当など、気にも留める様子もなかった。

「えっ、真白なおにぎり」、先生の弁当は真白なおにぎりだけだった。驚きと、悪い事でもしているようなやましい気持ちで思わずあたりを見回し、そしらぬ振りをした。

うちのおにぎりには、のりが巻いてあった。そ

のせいかな、のりが大好物だ。特に岩のりが好きだ。何故かこの頃は見かけない。あのザラザラした手触りと香り。直火で炙り、醤油をきつと付け、温かいご飯にのせ、箸で巻いて食べる。鼻から磯の香りが抜け、ご飯とのり、醤油が混ざり合う香りが食欲をそそる。食いしんぼうの至福の時であった。

子供の頃、ガスがなく、かまどでご飯を炊いていた。母は櫃に移す時、私達を呼び寄せお釜の底にできたおこげで塩おにぎりを作った。炊き立てのまだ熱いおこげのおにぎりを平気な顔でリズムよく、お手玉でもするように丸めていく。思わず弟達にはわからないように唾を飲み込んでいた。今は美味しい物が氾濫しているが、おこげのおにぎりに勝るおやつはないのではと、懐かしく思い出される。

先生の母親は看護師と聞いたような気がする。きつと忙しかったのだろう。だから先生は自分でおにぎりを作ったのかもしれない。先生のあの大きなグローブのような手で、ボールよりも小さなおにぎりを作っている姿を想像し、あの不揃いの真白なおにぎりを思い出すたび、胸が熱くな

り励まされる。

弱い自分の心に負けないようにと。

二十代も後半のまだ若い先生は、いつも白いスポーツシャツを着ていた。浅黒く太い腕、目は細く切れ長、口は一文字に結ばれて顎は野球のベース形で角ばっていた。名前は松本先生。あだ名は「まっこう鯨」、学生時代の友人が付けたと聞く。「まっこう鯨」の年はないと書いた年賀状が届いたと、皆を笑わせた。男子は教室で騒ぎ、よく注意されていた。授業中にチョークが飛んで来ることもあった。女子はそれを見て、怖い先生というイメージを持ったが、思いやりのある先生だった。腹が痛い、仮病で保健室に行った。家に帰らなかった。頭が悪いという劣等感の塊で、何事にも自信を持てずにいた。この時も何かから逃げようとしていたようだ。そのとき松本先生の大きな手が、脛を包むように押さえてくれた、とても暖かくその大きな手、指までも思い出す。

中学校は、先生の勧めもあって、皆とは別の女子高へと進学した。

先生は小さい頃に小児マヒを患い、少し左足が不自由だった。普段は気づかないが、生徒を引率

して走り始めると、左足の運びが右足より遅れる。両腕は胸のあたりに構えて。真白な帽子と体操服は大きな塊となり、校庭を走る。

先生の不自由な足は蒸気機関車のピストンを連想させた。その姿は蒸気を吹き出しそうな勢いがあった。

最近、海洋生物のテレビ番組を見ていた。「まっこう鯨」が深海に潜って行くシーンが映し出された。深く泡立った紺碧の海に、「まっこう鯨」は、撮影するカメラマンを横目に睨み、「ここまで追いついてこれるかな」とでも言いたげに深く深く潜って行った。目の周りにある深いしわは笑っているようにも見える。

鋭い、でも優しさを感じさせる目、大きな真黒な体で深海へと潜って行く鯨の姿は、先生を彷彿とさせるものがあった。今になり、なぜ「まっこう鯨」なのか分かった気がしている。今年、先生は春の叙勲を授けられたと聞く、小学校卒業以来お会いしていない。真白なおにぎりと共に、思い出の引き出しが開いていく。